

建学の精神と文学部文化財学科の教育

鶴見大学仏教文化研究所所員 石田 千尋

はじめに

今回のシンポジウムにあたって、仏教文化研究所より「建学の精神と文学部の教育について」話すようにとの依頼を受けました。しかし、文学部はそれぞれの科が個性に富んでいる上、私には文学部全体のことをお話しするだけの技量もございませんので、今回は私の所属する文化財学科の教育に絞って報告させて頂きます。

文学部の沿革(表1)に示しましたように、今から五十年前の一九六三年(昭和三十八)四月、禅の実践行による社会福祉の推進と、社会の向上に貢献することを目的として、日本文学科と英米文学科をもって文学部が開設されました(鶴見女子大学)。そして、一九九八年(平成十)、更に教育・研究の充実・発展を計るために男女共学とし、それと同時に、文化財学科が新たに設けられました。二〇〇四年(平成十六)にはドキュメンテーション学科が設立され、現在文学部は四学科体制で進んでおります。

この内、文化財学科は貴重な文化財を後世に伝えるための基礎から応用までを学び、文化財の調査・研究や保護・修復を担当する専門家を育成するため、次の四つの柱をその教育課程の基本的な考えとしてまいりました。

- ① 建学の精神に則り社会人としての広い教養の育成
- ② 多様な内容をもつ文化財に対する理解と幅広い視点
- ③ 学外の社会にも目をむけた実習を中心とする実物教育
- ④ 深い専門性と幅広い選択の可能性

この四つの柱の内、①は本学文学部で従来より重視してきたところで、文化財学科はこれを基盤として②③④の三つの柱を実現するための教育課程を編成しています。

ここでは、建学の精神「大覚円成・報恩行事」の実践教育の一例として文化財学科の教育課程の四つの柱を中心に紹介し、その後、学科の特徴の一つである実習科目についてお話しさせていただきます。

一、文化財学科の教育

文化財学科の四年間の学びを図で示しますと図1のようになります。①を実現するものとして、文学部共通科目・他学科科目をおいています。②を実現するものとして基礎概説科目。これは全て専門必修です。そして③を実現するために、実習科目、さらに演習科目、卒業論文とつなげております。④を実現するために、専攻科目をおいています。

①建学の精神に則り社会人としての広い教養の育成

この①を実現するために文化財学科では共通科目として、建学の精神を具現する「宗教学」を必修にすえております。その他に必修としまして、現代の学生に不足しているといわれる日本語能力を補うための「日本語」をはじめとして、「体育」、「英語」等を課し表2に示しましたように数多くの共通科目より自由に幅広く選択できるようにしております。

②多様な内容をもつ文化財に対する理解と幅広い視点

この②を実現するために、入学後、早い時期に文化財についての基礎的知識と研究の進め方を学ぶ「文化財研究法」をおいています。これは通年科目なのですが、文化財学科の専任教員がオムニバス形式で担当しております。そして、

表 1 文学部の沿革

1963	鶴見女子大学に文学部（日本文学科・英米文学科）設置認可
1989	鶴見大学大学院文学研究科日本文学専攻・英米文学専攻修士課程開設
1994	鶴見大学大学院文学研究科日本文学専攻博士後期課程開設
1997	鶴見大学大学院文学研究科英米文学専攻博士後期課程開設
1998	鶴見大学文学部を男女共学 鶴見大学文学部に文化財学科開設
2002	鶴見大学大学院文学研究科文化財学専攻博士前期・後期課程開設 鶴見大学文学部英米文学科を英語英米文学科に名称変更
2004	鶴見大学文学部にドキュメンテーション学科開設

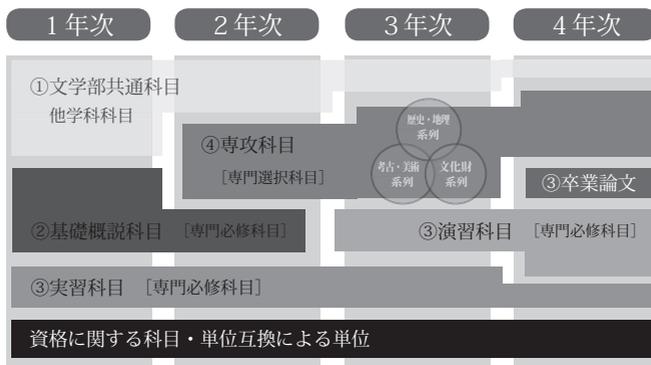


図 1 文化財学科 4 年間の学びの流れ

表 2 文学部共通科目

建学の精神を具現する「宗教学」を必修科目にする。

日本語・体育・英語・フランス語・ドイツ語・中国語・選択英語Ⅰ～Ⅵ・情報リテラシーⅠ・情報リテラシーⅡ・キャリア形成論・キャリアスキル演習Ⅰ～Ⅴ・表象文化論Ⅰ～Ⅳ・地域文化研究Ⅰ～Ⅵ・外国文学Ⅰ～Ⅳ・法学・世界歴史・日本歴史・政治学・社会学・経済学・倫理学・地誌学概説・哲学・言語学・心理学・ジャーナリズム論・コミュニケーション論・地球環境論・科学技術論・ボランティア論・健康科学・生涯スポーツ

文化財を生み出す背景をなす科目である「考古学」・「文化人類学」・「地理学」を設け、さらに文化財を活用するための「博物館概論」・「博物館経営論」、歴史の基本である史料を読み込むための「歴史資料講読」。以上、七科目の基礎概説科目を必修とし、一部に片寄らない基礎的素養を身につけさせると共に幅広い視点を学生に与えるようにしております。

③学外の社会にも目をむけた実習を中心とする実物教育

この③を実現するために、一年次から四年次にわたって実習科目をすべて必修としておいています。文献資料・物質資料についての調査・研究方法から資料の取り扱い方などの技術的な面にもふれ、さらに文化財の保存・修復の実技・実験や、文化財の実物を学外に巡検するなど、幅広い内容を含めています。実習の詳細につきましては後ほど紹介させていただきます。

また、三年生の後期から四年生にかけて演習科目をおいています。文化財学科の専任教員九名全員が演習科目を持っています。学生は指導教員のもとで自己の専攻を深めつつその成果を発表し、最終的にはそれを卒業論文として提出しております。

④深い専門性と幅広い選択の可能性

この④を実現するために、まず、専門の選択科目を専攻科目と名づけ、学生の将来の進路や知的探求心の系統づけをはかる三つの系列を設けています。

一つは歴史・地理系列。文献資料を主な研究手段とする科目群です。そして考古・美術系列。これは物質資料を主な研究手段とする科目群。さらに文化財系列。これは主に文化財の科学的特性と文化史的背景を学ぶ科目群です。こ

の三つの系列を設け、それぞれ十科目ずつ配置しています(表3)。非常に贅沢な科目群ですけれども、歴史・地理系列には「日本史」・「仏教史」・「地理学」・「地誌学」そして「文化史」・「古文書学」。考古・美術系列では、「考古学」・「美術史」だけでなく「建築史」や「工芸史」、「史跡特論」をおきました。文化財系列では文化財の科学的特性を学ぶための「文化財科学」、そして文化史的背景を学ぶための「有職故実」をおき、さらに遺跡保存や工芸品の修復・保存科学などを講じる「文化財各論」をおきました。

この専攻科目(専門選択)には、十六科目取る縛りを設けております。たとえば、歴史・地理系列を専攻したとしても。歴史・地理系列十科目の中から八科目以上取り、そして他の二系列から三科目以上取るようになります。しかし最低の八・三・三では十四科目になってしまうので、さらにプラス二どころか取るようになります。歴史・地理系列が特に好きだということであれば、その系列を十科目取り、他の系列からは三・三で十六科目。また、他の系列も学びたいということであれば、歴史・地理系列を八で、他を四・四で十六科目でもよいわけです。さらに十六科目だけでなく合計でたくさん取っている学生も何人も見受けられます。この専攻科目(専門選択)を三系列に分けて学んでもらうことが文化財学科の一つの大きな特徴になっております。

二、文化財学科の実習科目

専攻科目と共に文化財学科の大きな特徴と致しまして、一の③で述べました実習科目を挙げる事ができます。実習科目は教室でおこなうものもありますが、学外に出てさまざまなものを見聞し、視野を広げております。この実習科目は全て必修とし、次のように一年次から四年次まで設けております。

1. 実習ⅠA(一年生前期) 近隣の文化財巡検

2. 実習ⅠB (一年生後期) 考古学資料の整理
3. 実習ⅡA (二年生後期) 古文書の修復
4. 実習ⅡB (二年生夏期集中) 遺跡の発掘と整理
5. 実習ⅢA (三年生前期) 分析・保存科学
6. 実習ⅢB (三年生夏期集中) 美術品の扱いと展示
7. 実習Ⅳ (四年生夏期集中) 遠隔地の文化財巡検

1. 実習ⅠA 近隣の文化財巡検

一年生の前期に集中としておこないます。集中と申しましても、土曜日や日曜日を活用して三十時間おこないます。近隣の文化財巡検ということで、春の一泊見学旅行や、鎌倉の古社寺・横浜の開港関係地、遺跡や博物館などを見学します。もちろん見学するだけではなく、そこで学んだことを後日図書館などで調べ、毎回レポート提出を課しておきます。

今年の春の一泊旅行は群馬に行つて参りました。初日(四月二十日)は富岡製糸場を見学しました。図2は、現地のボランティアの解説者からいろいろお話を聴いているところです。富岡製糸場は今、世界遺産に向けて活動されています。先週六月一日(土)、鶴見大学でおこないました文化財学会では群馬県企画部世界遺産推進課長の松浦利隆先生に「産業遺産と世界遺産―富岡製糸場と絹産業遺産群の登録―」と題して御講演を頂きました。したがって、一年生は現地を見学し、さらにその後、学会で最先端で働いている方のお話を聞くという恵まれた時を過ごしたわけです。一泊旅行の翌日(二十一日)は日本における旧石器時代の存在を初めて立証した岩宿遺跡などを見てまわりました。

表3 専攻科目：(専門選択)

○歴史・地理系列	○考古・美術系列	○文化財系列
日本史Ⅰ	先史考古学	文化財科学Ⅰ
日本史Ⅱ	歴史考古学	文化財科学Ⅱ
日本仏教史Ⅰ	日本美術史Ⅰ	有職故実Ⅰ
日本仏教史Ⅱ	日本美術史Ⅱ	有職故実Ⅱ
歴史地理学	建築史Ⅰ	文化財各論Ⅰ
歴史地誌学	建築史Ⅱ	文化財各論Ⅱ
日本文化史Ⅰ	工芸史Ⅰ	文化財各論Ⅲ
日本文化史Ⅱ	工芸史Ⅱ	文化財各論Ⅳ
古文書学Ⅰ	史跡特論Ⅰ	文化財各論Ⅴ
古文書学Ⅱ	史跡特論Ⅱ	文化財各論Ⅵ



図3 実習ⅠA 近隣の文化財巡検(2)



図2 実習ⅠA 近隣の文化財巡検(1)



図5 実習ⅠA 近隣の文化財巡検(4)



図4 実習ⅠA 近隣の文化財巡検(3)

また、例年この実習ⅠAの初回は總持寺および總持寺宝物殿を見学しています。図3は仏殿の前で河野教授が建築様式の解説をしているところです。図4は宝物殿で学芸員の解説を聴いているところです。宝物殿には専任の学芸員二名と非常勤の学芸員が一名おります。お陰様で三名とも文化財学科の卒業生です。図4は遠藤学芸員が後輩に向かっていろいろ解説をしているところですが、新人生にとっては憧れの先輩ということになります。

図5は五月十二日の日曜日に鎌倉巡検をおこなった際の様子ですが、円覚寺の鐘楼前で仏教美術史担当の緒方准教授から解説を受けているところです。

2. 実習ⅠB 考古学資料の整理

一年生の後期二時間連続でおこないます。完形で入荷された弥生式土器の模造品を助手が木槌で上手に割り、粉々になったものを袋に入れて学生に渡します。そして、これを接合して完全な形にします(図6・7)。その後、図面を取り、拓本で文様を写し取り、大型カメラで撮影して、出版物の原稿を作成するまでの流れを学びます。

3. 実習ⅡA 古文書の修復

二年生の後期、こちらも二時間連続で実習します。古文書を読み込むことは、一の②で述べました基礎概説科目の「歴史資料講読」を二年生の前期に必修としておこなっています。実習ⅡAでは古文書を文化財として扱うことに重点をおいています。したがって、史料の扱い方、写真撮影や調書の作成、さらに虫喰いの穴の「繕い」や「裏打ち」など、修復技術までを実習します。図8は虫損の擬似文書を使用して「繕い」をおこなっているところです。「繕い」は古文書の欠損部分に補修紙を嵌め込み(糊づけする)欠損穴を埋め、欠損穴のない状態にする作業です。図9は同じく擬似文書を使用して「裏打ち」をおこなっているところです。「裏打ち」は劣化、損傷がある古文書の裏に、和紙を



図6 実習ⅠB 考古学資料の整理 (1)

← 図7 実習ⅠB 考古学資料の整理 (2)

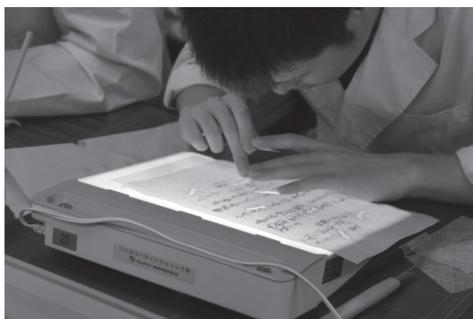


図8 実習ⅡA 古文書の修復 (1)

← 図9 実習ⅡA 古文書の修復 (2)



図11 実習ⅡB 遺跡の発掘と整理 (2)



図10 実習ⅡB 遺跡の発掘と整理 (1)

小麦澱粉糊で貼り付け耐久力をつける作業で、「繕い」「裏打ち」共に日本の伝統的修復作業です。実習では全ての修理がおわりましたらその修理された古文書と調書をあわせて提出するようにしています。

4. 実習Ⅱ B 遺跡の発掘と整理

この実習は二年生の夏休みに一週間集中で三十時間おこないます。専用の実習場（鶴見大学女子寮のグラウンド）に埋まった弥生期の竪穴住居址を掘り出し、測量機器を駆使して精密な断面を作成します。図10は草むしりをした後、荒掘りにかかる場面です。図11はだいたい発掘が進んだところです。図12は地面のレベルを測っているところです。この現場での実習と一年生後期におこなう考古遺物の整理（実習ⅠB）を身につけることにより、どこの現場に行っても通用することになります。いまままでに一年生から鎌倉などの現場に入っている者もいますし、卒業生で鎌倉の現場の調査員や団長になっている者も何人もいます。

5. 実習Ⅲ A 分析・保存科学

三年生になりますと、前期に分析・保存科学の実習を二時間続きでおこないます。実体・電子顕微鏡、赤外線、X線透視検査装置、蛍光X線分析装置で資料の形状や成分を分析したり、金属遺物、木製遺物の樹脂含浸保存処理を実習します。図13は陶磁器の断面を電子顕微鏡で千倍にして検査しているところですが、文学部とは思えない風景がこの実習では展開しています。図14はX線透視検査装置で箱に入れた仏像を測定しているところです。図15は蛍光X線分析装置で金属の元素を調べているところです。図16は発掘された小銭を処理して、そこに書かれている文字を読み取り、何時代のどういう古銭かということ調べているところです。図17は古文書（擬似文書）に漆を塗り、肉眼では見えないようにしたものに赤外線を当て、特殊なカメラで読み取ることをおこなっているところです。画面に映し



図 13 実習Ⅲ A 分析・保存科学 (1)



図 12 実習Ⅱ B 遺跡の発掘と整理 (3)



図 15 実習Ⅲ A 分析・保存科学 (3)



図 14 実習Ⅲ A 分析・保存科学 (2)

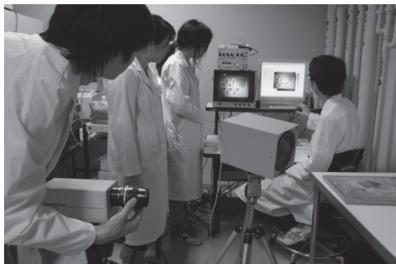


図 17 実習Ⅲ A 分析・保存科学 (5)



図 16 実習Ⅲ A 分析・保存科学 (4)



図19 実習Ⅲ B 美術品の扱いと展示 (2)



図18 実習Ⅲ B 美術品の扱いと展示 (1)



図20 実習Ⅲ B 美術品の扱いと展示 (3)

← 図21 実習Ⅲ B 美術品の扱いと展示 (4)



図 2 3 実習Ⅳ 遠隔地の文化財巡検 (1) (国外)



図 2 2 実習Ⅲ B 美術品の扱いと展示 (5)



図 2 5 実習Ⅳ 遠隔地の文化財巡検 (3) (国内)



図 2 4 実習Ⅳ 遠隔地の文化財巡検 (2) (国内)



図 2 7



図 2 6 総持寺宝物殿学芸員内藤沙織さん

出されたものから虫喰いや擦れを確認し、文字を読み、この古文書が一体どのようなものなのか、時代はいつか、どのような内容のものなのか、そこまで調べてレポート提出となります。二年生の時に古文書関係の授業や実習をおこなっていますので、そこでの知識を活用して報告書作成ができていくわけです。

6. 実習ⅢB 美術品の扱いと展示

三年生の夏休み一週間三十時間の実習です。掛け軸や工芸品の取り扱い（図18・19・20・21）と共に、保管管理法・展示解説法を学びます。さらに、展示・公開されているところの現地見学も二泊三日で行います。昨年は福山から入り、尾道・大三島、今治・香川・徳島・淡路島を通って神戸で解散しました。

また、図22は千歯こきを保存処理しているところですが、このようなことも実習します。文化財学科は川崎市市民ミュージアムと連携協力の関係にあり、川崎市市民ミュージアムが所蔵しているこの千歯こきを実習で使用させて頂いています。これは錆を保存処理している場面ですが、極力もとの形にしてお返ししています。この時は刃先に刻印があることがわかり、実習ⅢAで解説しました赤外線を使って読み取り、その結果、流通業者や何年に作製されたものか判明しました。

7. 実習Ⅳ 遠隔地の文化財巡検

四年生になりますと、実習も最終的なまとめとなります。夏休みに集中で一週間三十時間の遠隔地の文化財巡検をおこない、報告書を提出します。国外コース・国内コース・自主コースの中から各自選択します。自主コースは事前に自分で全てプランを立て指導教授からOKができればその旅行、巡検を実施します。これまでに四国八十八カ所踏破、会津塗り工房体験、伝統的建造物群の宿場探訪、出雲大社周辺神話めぐりなどユニークなものがありました。国外コ

ースは、中国・台湾・カンボジア・インド・イタリア・チェコ・ハンガリー・ドイツなどを今までに訪問しました。国内コースでは、沖縄のグスク群や石見銀山などの世界遺産、北海道や九州、四国の史跡などを巡っています。

図23は昨年の国外コースでドイツのツヴィンガー宮殿を訪れた時の様子です。図24は一昨年国内コースで長崎の出島を訪れた時の様子です。出島は西暦二〇〇〇年から一〇〇〇年計画で復元しつつありますが、この図24では、出島復元整備室の山口さんから出島の発掘の進行状況を解説して頂いているところです。図25は長崎歴史文化博物館のバックヤードを見学させて頂き、修復室で虫損文書の修復に関する解説をお聴きしているところです。学生達は二年生の時に古文書修復の実習経験がありますので、かなり興味をもって聴いていました。

おわりに

以上、文化財学科の教育を四つの柱を中心に紹介し、後半はその中で学科の特徴の一つである実習科目について具体的に話をさせて頂きました。文化財学科も今年で十六年目を迎えました。卒業生はお陰様で民間企業などで活躍しているものも多くあります。また、学科で学んだ実習などを生かし文化財関係に就職している者も何人もおります。学芸員、教員、埋蔵文化財調査員の他、民間企業の発掘調査員、漆研究の知識を活かす仏壇仏具企業、文化財調査に必須のハケの専門メーカー、日光東照宮の修理、博物館の陳列ケースの専門メーカー、イタリアでの絵画修復などです。

図26に紹介したのは、總持寺宝物殿で学芸員をしている内藤さんです。平成二十三年、總持寺の御移転百年記念ということで、桜木町にあります神奈川県立歴史博物館で特別展「總持寺名宝一〇〇選」が開催されましたが、その時入口で撮影したものです。この特別展でも大いに活躍していました。図27は三期生の山口くんです。現在東京大

学史料編纂所で古文書修復の専任として勤務しております。毎日重要文化財クラスの古文書を修理していますが、せっかくこのような卒業生がいるわけですから、実習ⅡAの一クラスを非常勤講師として担当してもらっています。

鶴見大学文学部文化財学科は、実物・実地・実体験主義のもと「歴史・美術・考古・保存科学」を総合し、貴重な文化財を後世に守り伝える学識と技を学ぶことを主眼にしています。それを支える基盤となるものが、建学の精神で謳うところの「大覚円成・報恩行持」―感謝を忘れず真人となる―です。常識をわきまえた人格形成の育成と相俟ってはじめて知識と技術が本来の使命を果たすわけであり、そこに本学文化財学科の目指す教育があります。